
「教養科目におけるペア科目の活用方法と教育的効果」

研究代表者	上垣 豊	(法学部)
共同研究者	田口 律男	(経済学部)
	小長谷 大介	(経営学部)
	谷垣 岳人	(政策学部)
	東山 薫	(経済学部)

1 今年度の課題と取り組みの概要について

昨年度に引き続き、ペア科目(週 2 回の授業)に関する FD を行った。2016 年度では次のような課題と取り組みを掲げた。

「単位制度におけるペア科目の意義を学び、本学の教養科目のなかでペア科目が教育効果を発揮する条件と活用の課題を検討し、カリキュラム開発と授業方法の改善に役立てる。そのために下記の取り組みを行う。

- (1) 外部から講師を招いて研究会を開催する。
- (2) PJ メンバー間で具体的経験をだして議論し、ペア科目の効果的な活用の仕方を検討する。
- (3) 新旧カリキュラムでのペア科目受講者の変化を調べる。
- (4) 授業評価アンケートの活用など、教育効果を測定する方法を検討する。
- (5) 昨年度に実施したアンケートをもとに、アンケート項目を改善し、アンケートを実施する。

このうち、(1)、(2)、(5)は実施できたが、(3)、(4)は実施できなかった。

(1)、(2)については、10月27日に追手門学院大学の池田 輝政先生を招いて研究会を開催し、その際に PJ メンバーの東山 薫先生(経済学部)がペア科目の実践報告を行った。

また2月24日に学内で研究会を開いて竹内 綱史先生(経営学部)と中田 裕子先生(農学部)にペア科目の実践報告を頂いた。

(5)については、受講生へのアンケート項目を整理、検討し、前期の西洋の歴史 A の受講生を対象にアンケートを実施した。なお、10月27日の研究会で小瀬 一先生(経済学)にペア科目導入の経緯と、その後の変化について報告をいただいた。

二つの研究会で行われた実践報告はいずれも、ペア科目の教育効果を実践的に確認するものであった。また、追手門学院大学の池田先生からは、とくに体系的な内容を学ぶ場合は、ペア科目が有効であるとの教示を受けた。教える内容と時間が密接な関係があることも、教えられた点である。

ほかに、小瀬先生の報告によって、ペア科目導入の経緯とその後の取り扱いの変化が明らかになったことを大きな成果として挙げておきたい。

以下、10月27日のFD研究会の報告と質疑応答を資料として掲げておく。

10月のFD研究会は下記のような要綱で開催された。

主 催	教養教育・学部共通コース FD 研究開発プロジェクト 「教養科目におけるペア科目(週 2 回授業)の活用方法と教育的効果」
タイトル	週 2 回実施授業(ペア科目)の活用方法
内 容	昨年度に引き続き、追手門学院大学から池田輝政先生をお招きして、今

回はペア科目の実践的な活用方法をテーマにして FD 報告会を開催します。報告者は経済学部の小瀬先生と東山先生のお二人で、それぞれ専門科目と教養科目の授業での実践を報告します。その後、池田先生に追手門学院大学での取り組みや全国の動向を踏まえて、本学でのペア科目の実践にコメントをいただきます。

開催日 10月27日(木)
 時間 16:40~18:10
 開催場所 和顔館4階会議室2
 対象 本学の専任教職員(特任を含む)・非常勤講師 学外者も可
 報告者 東山 薫(経済学部 講師)・小瀬 一(経済学部 教授)
 ディスカッション 池田 輝政先生(追手門学院大学 学長補佐/アサーティブ研究センター長/
 基盤教育機構教授)「追手門学院大学の取り組みを踏まえて」

10月に行われたFD研究会の報告と質疑・応答の大まかな内容(テープ起こしした文章を縮約し、誤りなどを訂正したものは下記のとおりである。

2016年10月27日 ペア科目FD研究会 (文責:法学部 上垣 豊)

司会(上垣 豊):本日は、昨年度に引き続き、追手門学院大学から池田輝政先生をお招きしてペア科目(週二回の講義科目)に関する研究会を開くことになりました。

今年は、最初に教養科目で心理学を担当している経済学部所属の東山先生からペア科目での実践報告をいただき、その後、同じ経済学部所属の小瀬先生から本学でペア科目が導入されたいきさつやその後の変遷についてお話しいただき、最後にディスカッションとして、池田先生に全国的な大学改革の動向を交えて、追手門学院大学で現在進行中の教学改革を紹介していただき、あわせて、東山先生と小瀬先生の報告へのコメントをいただきたいと思います。それでは早速、東山先生にご報告いただきます。

東山 薫先生:経済学部にも所属しています東山です。私の「心理学」の授業は大人数ですが、manabaを使って出席を取れば時間の短縮になります。授業開始のチャイムが鳴りましたら、

「はい、チャイムが鳴り終わりましたので授業を始めます」、

「まずいつものように出席カードの提出から行います」と言って、注意を喚起します。

出席という箇所を押すと、番号が発行されます。学生が自分のスマートフォンや携帯からこの番号を入れると、私の方に出席の状況と、何時何分に送信したかが、全部表示されます。

学生がラインとかで番号を送って代理で出席するのを防止するための一つの対策として、最初に出席をとり、加えて必ず最後にも出席を取ることにしています。

例えば、先週は『学習』というテーマで授業をしましたが、プリントなどを配布しながら、古典的条件付けについて説明していき、この説明をきちんと聞いていないと答えられないような問題を最後に設定しました。

チェックを入れて答えられる問題だけではなく、たまには文章で説明するようなものも入れることにしています。授業を聞いてれば必ず答えられるけれど、聞いてなければたぶん答えられないような、問題を毎回用意していま

す。

遅刻した学生には紙の出席カードを配るようになっています。電池がなくなった学生や電波が届きにくい学生には、その日に決まった色の紙を渡します。

補足資料として、このスライドで見せている画面をプリントにして配布しています。

龍谷大学に着任した最初の年であった昨年度は、「先週休んだのでプリントください」という人がいっぱいいて、対応しきれなかったのですが、この manaba を使うと便利です。

宿題もコースコンテンツ、あるいは掲示板に出すことができます。掲示板で宿題をだす場合、例えば記憶のテストが正しいか間違っているかという問題の解答を、一人一人送ってもらいます。そうして、人間の記憶システムがどうなっているのか、今本当にタイムリーな実験を受けた学生の実験データを示す事によって、少しでも興味を持ってもらえるように工夫をしています。

こういうふうに、大人数なのでなるべく平等にできるような授業を展開しようと考えております。

出席をとった後、成績をつける段階では、総合出席表のようなものを出して、ダウンロードしますと、1 回の授業につき出席をとるのが 2 回なので、それが自動的にエクセルになって出てきます。

休んでいると空欄になります。最終的には出席の総合点が出て、応じた計算を指定すれば一発で出てきます。

2008 年度の韓国の東国大学のシラバスでは、開始が 8 時半、しかも 0 講時、0.5 講時、1 講時、1.5 講時というように、かなり細かく、30 分単位で区切られています。

例えば資料の一番上にある科目は、開講時は、4.0 から 4.5、つまり、13 時から 15 時になっていて、ペア科目ではないことがわかります。

日本のように 1 時間半という授業時間と決まっているわけではなく、1 時間のものがあったり、11 時から 13 時というふうに 2 時間を通してやるような授業もあったりします。

次の 2 枚目からペア科目の時間割になりますが、日本と同じ 1 時間半の構成になっています。月曜日が 9 時から 10 時半と、木曜日の 9 時から 10 時半の 2 回授業があります。

これこそまさにペア科目になっています。龍谷大学では、ペア科目は同じ時間で行っていますが、水曜日の 1 回目は 15 時から 16 時半、2 回目は 16 時半から 18 時となっていて、結局通して 15 時から 18 時までと、同じ日を通して授業をしています。これもペアという概念でくくっているようです。日本に比べると色々な形があるような気がしました。

竹内綱史先生「宗教学入門」等担当、経営学部所属)質問:その場で、スマホで通信させるわけですね。トラブルはないですか?例えば、つながらないとか。

東山先生:あります。

竹内先生:それは頻繁に起きそうな気がしますが?

東山先生:250 人の授業の中で、通信状態が悪くて紙の出席カードを取りに来る学生は、多くても 3 人位です。最低 5 分ぐらいは待って「まだできてない人いますか」と言って手を挙げさせます。手を挙げている学生が 2 人、3 人ぐらいになった時に「それでは締め切りますので、つながらなかった人は前に出席カード

を取りに来てください」と言って締め切るわけです。

竹内先生:スマホを大っぴらに使うのを許可するのはいいのでしょうか。

東山先生:締め切りが終わったら、スマホをしまうことになっています。

司会:それでは次に小瀬先生からご報告いただきます。

小瀬先生:深草学舎に経済学部ができて以来、一般教養問題があったのですが、78年
が一つターニング・ポイントになります。それまで文学部の中にあった一般
教育部という組織を解体して、一般教育部に所属して一般教育を担当されて
いる先生を各学部にも所属させるという、組織変更が78年に行われました。こ
れによって、組織問題としては各学部分属という形でおさまりました。それ
を踏まえて、一般教養を中心に全体として、大学教育の中身とか、カリキュ
ラム、教育方法というところに眼が移っていきます。

1984年に大学の第二次長期計画が作成されます。長期計画を立てて学校経
営とか色々なことを議論していくということは、龍谷大学が最初であるなど
と、一番古い先生方からだいぶ聞かされました。この第二次長期計画では、
カリキュラム関係も議論されています。

現在は、教学部等の別の組織が整備されて切り分けてやる必要もなくなり、
それぞれの部署で行っていますが、当時は第二次長期計画という大きな枠組
みの中にカリキュラムの問題が書かれています。

長期計画は財政とかあるいは移転問題のまとめを議論するところであっ
たのですが、カリキュラムだけは抜き出して、全学カリキュラム改革委員
会で議論されることになりました。

全学カリキュラム改革委員会の名でだされた、1987年3月付けの「実施素
案」という文書を見ると、もはや検討課題の議論を越えて、実は実施案に近
いような文章になっています。

主な内容としては、教育体制、すなわち1年半の基礎教育と、2年半の専
門教育、

次にコース制、3番目にゼミ体系、4番目にセメスター制、5番目がグレー
ド制、6番目がGPAの運用、7番目が履修単位制限となっています。1~4ま
でについては、88年4月より運用を目指す、となっています。

84年の第二次長期計画立案の時にすでに、一般教育の在り方として、グ
レードナンバー制の導入をするという記述が何度も出てきます。セメスター
制度への移行、GPAシステムの導入、カウンセリング制度等の確立、これらが
履修制度の変更として84年5月に既に提案されています。

これらの問題が、85年の企画委員会で議論されました。第2次長期計画の
策定にあたって答申を出したのが、この企画委員会です。臨定増と臨定終了
後の対応が、当時の大きな課題でした。

龍谷大学は、多分全国で2番目に多く臨時定員を受け入れたのではないで
しょうか。全学で1000人ぐらい、経済学部の定員は当時400名だったのです
が、600名まで受け入れ、法学、経営も同じように600人という数を当時受
け入れました。

臨時定員の恒常化も課題になっています。臨時定員をとることによって財
政的に豊かにしながら、大学改革とか大学の施設の更新を行おうという、長
期計画の大きな流れの中で、カリキュラムについても議論されたということ
になります。

セメスター制とは、次のようになります。4年間の大学の教育課程を8つ

の Semester に分割して、1 種 2 コマの 1 Semester 完結型を 4 単位型とし、これを基本型とします。

カリキュラムの多様化と学生の選択幅の拡大、それと合わせてグレード制をしき、集中的、系統的、段階的学習が可能になる、教員が研究と教育に集中できる期間を創出する、

つまり前期だけに授業をぐっとかためて、後期には授業を持たなくてよいようにすると、こういうのが導入された時にあげられた利点です。

Semester 制導入の意義として、学生の段階的選択自由度が拡大し、多様な履修が可能になる、2 つ目として 8 段階制を軸とした、系統的指導が可能になる、ということがあげられています。ですから当時のイメージでは、8 つある Semester の一つ一つの Semester を段階にして、

グレード制と合わせて行って、系統的に学習を深めていくというように考えられていました。ですからグレード制の導入と合わせて厳しい受講制限をつけています。

1 Semester 当たりの単位制限を 20 単位程度に設定することによって、1 科目 4 単位ですから、5 科目以内の少数の科目に、勉学のエネルギーを集中することができる。という点が企画委員会の答申で挙げられています。これが後々まで残って行く一番大きなメリットであろうと思います。

Semester で週 2 回の授業ですが、同一曜日で連続して開講する場合も想定されていました。その場合は 5 限目 6 限目を使って 4 単位を与えるというようになっています。

当時は、明らかに 4 単位科目が主流であるべきと考えられていました。

専門科目についても、Semester 制の教育効果を活かすために必修科目もしくは選択必修科目については、可能な限り複数開講を行うとし、前後期にそれぞれ同一数を均等に開講して、学生が毎学期に受講できる、教員の方から見れば前期だけ後期だけですが、学生から見ると前期にも後期にも同じ科目があるということにしよう、

こういうことが 87 年の文書に書いてあります。このことは全学カリキュラム改革委員会の実施案にも触れられていることです。

このような改革案は評議会を通過して、88 年 1 月に全学カリキュラム改革委員会文書

「昭和 63 年度カリキュラム改革実施にあたって」が出されます。そこでは、それまでは通年 4 単位での開講が主でありましたので、ただちに全ての科目において完全 Semester に移行することは困難と判断されました。

その結果、88 年度について開講方法は次のいずれかにする、と書かれています。つまり、半期で週 2 回 4 単位にできる科目はそうして、それが難しい科目では単位を分割して 1 学期 2 単位でも可である。1 週 1 回複数学期、つまり通年科目も認めるというように、非常に幅広いのです。1 週 1 回 1 学期完結で 1 単位 2 科目、もともと 2 単位の科目を二つに分けて 1 単位ということも可としています。

現実的な対応が採られたものの、この段階では基本的に 4 単位が主として考えられていたことを強調しておきます。

専任教員は原則として最低 1 人 1 科目は半期で完結するところを実現しようとしていました。理想は 4 単位完結だが、2 単位でもしょうがない、まずは前期後期に 2 単位のそれぞれ完結にして、通年というのはいずれどこかで

打ち切ろうというのが、この時の考え方であったと感じます。

開講時間帯ですが、それぞれが1・2限連続とかバラバラやっていると、マットがうまくはまらないので、4単位科目をおくマットをはめやすいように決めてしまおう、ということになりました。月木あるいは火金がセットで、これは現在と一緒です。ところが当時は、月1と木3、火1と金1、といったようにたすきがけに二つをセットにしています。

従来の科目年次配当ではなく、8セメで考えるということが基本ですので、セメスター配分、グレードナンバー制などが、一斉に行われればよかったです。そうはならなかったのです。まずはセメスター、つまり半期で完結するというアイデアをどこまで通すか、ということ为主要な関心事として進めていった。

この後の文書を追ったのですが、急激にセメスター制や4単位に関する関心が薄れているように見えます。萬井先生が教務部長をしておられた時に、カリキュラム改革ニュースが出されています。その中で龍谷大学の状況について個人的感想という形で意見がいくつか見られます。

91年6月5日付けのカリキュラム改革ニュースでは「本学のセメスター制は従来の前後期制を独立させて、登録評価を行い、プログラムの多様性を作り出そうとしているが、依然として通年科目を多く残している」とあります。文学部が特にそうだったのですが、文学部は通年科目を維持しておりました。

92年12月16日付けのニュースでは、「セメスター制が前進する」と見出しがうたれています。これは理工学部がセメスター制を入れたようですが、社会学部においても半年開講の科目が増える、と紹介されています。「京都団地カリキュラム構築委員会確認」(深草と大宮を合わせて京都団地と一時期呼んでいた)という形で、セメスター制に関して小さな決め事がなされています。ここは実は、一つポイントになっていると私は思っています。本来は「セメスター制の利点をより拡充するために、総合科目を含め、できるだけ2単位科目を配置する。現行4単位科目の分割開講を含めて変更する」とあります。

ところが、2の方には「学生選択幅、選択機会を多くすることによって、集中的学習を可能にするように配置する」という以前からの文章とよく似ているものも残っております。これが出て、すべてを4単位ではなく2単位科目でもかまわないということになったのではないかと感じております。

2単位化の流れは経営学部がまず採用して、そのあと法学部が追随するような形になります。現行でいうと、新たにできた政策学部も半期2単位完結型です。一方で経済学部だけが4単位科目を基本としています。

90年代の前半に京都カリキュラム改革委員会があつて、当時私は研究主任だったのですが、この会議に出ていました。その時に経営学部の方から提案されたのが次のような案でした。

経営学部は、専攻科目を入門・基礎・応用の3区分して、カリキュラムを編成し直したい。たとえばマーケティング入門・基礎・応用のように、入門基礎応用と3段階に重ねて、履修をおしすすめていくと、学生によっては基礎だけで終わるが、系統的に学びたい学生はどんどん積み上げていくことができる。

経営学部生である以上、入門は全員履修するが、基礎や応用の部分で濃淡をつけたい。そうしますと4単位では細かな積み重ねが難しくなるので、2単位科目にして、以上のようなアイデアに対応したい、そのように当時主張

されていたように記憶しています。

現在の運用上の特質ということですが、数年前にセメスターで15回授業を実施することになり、それまで2週間だった定期試験期間を1週間にするようになりました。

こういうなかで4単位科目が減ると、学生からすれば、仮に20単位を取っていた場合、10科目分の試験勉強をしなければなりません。経済学部は4単位科目が多いですから、経済学部の学生は5科目で済み、集中的に学習するという制度導入当初の意図・効果が図らずも意味を持っている結果になっています。

ただ最近経済学部の専攻科目の先生方と話していると、非常勤の方にお問い合わせするときに週2回というのはしんどいと言います。若手の教員からは2単位科目を多くしたほうがいいのではないかという声も上がっています。学部全体ではまだそうなっていませんが、ペア科目に否定的な意見もあるという感じです。

司 会: それではディスカッションとして、追手門学院大学の池田輝政先生にお話しいただきます。

池田輝政先生: 「第二次長期計画の策定について」を拝読しましたが、この考え方は経営戦略の全体を含めて設計したかったのではないのでしょうか。多分米国のものを[88改革のアイデアをだした]河村能夫先生は直感的に見て龍谷に移植されたのだと思います。

ところが全体設計の考え方を採用しても、それを組織プロセスのなかで動かしていく業務ノウハウが当時の日本の大学にはまだなかった。先行するアメリカの大学でも全体を動かす戦略設計のツールを開発はできても、業務現場でのその動かし方は90年代以降まではわからなかった。

実は河村先生がしたかったこと、それは全体設計でもって組織のいろいろなものを革新していくことではなかったのかと考えました。私は、2015年から、そのための戦略プランを追手門学院大学で起案する機会をもらいました。2016年から、大学の教学改革を戦略経営として進めていくために、入試・教育など8つの戦略テーマを大学全体として設計し、それらを業務プロセスのPDCAサイクルによって実現を図っていくことをしています。これを着実に進めていけば、10年くらいで大学が大きく変わっていくはずですよ。

改革には最短でも10年をかけないと大きくは変わりません。

テーマ1は入試の改革、2は教育の改革、3は国際グローバルの動きを作っていくこと、4は研究をもっと面白くしていく、5は学生支援、学生をもっとアクティブにさせて行こうというテーマです。6は地域社会との連携、7は組織の環境を整えていくことで、これには建物も含めて考えていく。8が経営の文化です。

追手門学院では理事長、学長のトップが強いリーダーシップをとって改革を進めていますけれど、実現には教学の現場の人たちが納得して動くことが不可欠です。そのためにテーマ8ではリーダーに対する「信頼の文化」を醸成する課題もそこには書かせてもらいました。今は学部や事務部門の全ての部署がこれにそって主要な全学課題に取り組んでいます。この取り組みの中で、教員と職員が業務において協働する必要性がわかってきます。

マネジメント職の現場スタッフの人が教育や支援の業務に参画してこない、改革は細かいところまで作り込むことはできません。そういうことを実

は狙われたのがこの第二次長期計画の導入ではなかったのか、と思います。

資料に整理されたカリキュラムの改革の歴史をみると、龍谷大学では教養の組織が先に廃止されています。カリキュラムの改革問題では組織は確かに厄介です。組織があるとカリキュラムをいじれない。だから教養部という厄介な組織はまずなくしましょう、というのは日本の大学全体の対応でもあった。龍谷大学で一般教育部がなくなったのは、教養担当の人たちが学部の分属になったのは、まず組織からなくそうという考えが表れていると思いました。

とくに 1984 年からの議論を今見ると、カリキュラムの改革ではなくてカリキュラムを動かすマネジメントの改革だったようにみえます。要するに教学マネジメントのところをいじりながら、カリキュラム本体ではなくて周辺のマネジメント部分を変えるというやり方が 1984 年からの動きではないでしょうか。

カリキュラムの改革であれば、本当は、学問分野に基づく科目群からなる全体設計が必要であって、そこから一つ一つの科目を配置していくことになります。例えば工学部だと熱力学という学問体系があって、そのもとにいくつかの科目が必要かという考え方をするはずです。そしていくつかの科目群の組み合わせでもって全体設計が成り立つ。そういう設計の発想ではなくて、科目をバラバラにして、すり合わせていく、積み重ねていく切り貼りの考え方で、大学はカリキュラムをいじってきたように見えます。これは日本全体にもあてはまりますが、ここにも現れています。

身近な例では、4 単位科目の扱いです。同じ 4 単位でも 2 プラス 2 に分けて教えるのと、分けずに 4 単位で教えるのでは教える側も学ぶ側も姿勢や態度は相当違ってくる。しかし、4 単位設計というその発想はもう日本の大学にはなくなってきました。通年制の時はあったはずなのに、セメスター制に切り替わってからは、2 単位に分断され縮小されてきた。

学生から見ると科目のつまみ食いをさせられている感じにならないのだろうか。日本の大学がだんだん、学ぶべき内容とその時間量の間、どのくらいの時間でどのくらいのことを学ばなければならないか、そういう考え方に鈍感になってきて、学生も教師もそれが当たり前になってきています。龍谷大学の先生方は、4 単位科目の大事さは直感的に理解されていたが、2 単位化の流れに対抗する理論武装ができていなかったように思いました。

国立大学に現在生じているクォーター制の動きを見ていくと、例えば K 大学は H28 年からクォーター制を取り入れています。

そのメリットは、いくつかの授業を短期間で集中できる、先生方が 1 学期は研究に専念できる、海外留学や企業インターンシップに参加しやすい、などが掲げられています。しかし、このクォーター制が部分設計の論理で進められていくと、せつかくのカリキュラム改革のメリットが台無しになってしまいかねません。学生をつまみ食いをさらに促す恐れがあります。

追大ではカリキュラムの科目を「商品」の全体とみなして、この 3 年を目途に学生に適切な「商品」の量と種類とサービスを全体的な観点から開発してみようと動きを始めました。そのカリキュラム改革の動きを続けて 10 年経てば、学生の成長に生かされてくるのではないかと期待しています。

ところで、先ほどの東山先生のご報告を聞くと、4 単位科目のなかでアクティブラーニングを取り入れるとされていますが、方法だけではなくて効果

をどうやって検証するのかというところまで工夫されると、もっと面白い議論が生まれるのではないかと思います。

自分で自己検証する、検証の方法論が大変重要であって、自分の授業がこれだけの効果を持っています、と言うことを、要するに商品の中身のところまで議論をする必要があります。追大でも、できれば4単位科目で教えられるような、そういう科目を作りたいと議論を始めています。ただし、学生の間にはすごい学力に差があります。すべての学生に一律に4単位科目を教えるのは現実には無理があるように思います。ですから2単位科目も残して、2単位科目を取った学生には GPA はつけない。可否で判断する。4単位科目を受けた学生だけに ABC をつける、そういう議論をしている段階です。

これは4単位から授業設計する発想にこだわることから生まれる議論であり、教育の中身にこだわる議論のあり方として成り立つのではないかと思います。

4単位をもしペアでやるならば、1週目には講義を、2週目はじっくり何か問題に取り組ませるとか、ディスカッションするとかして、学生の学び方に工夫を加えるやり方が求められます。4単位ペア科目の考え方を活かすためには、授業の中身も学生の関心に応えるような方向に変えていく教師の開発の力量が問われることとなります。

追大ではクォーター制を取り入れることを検討していますが、それも2019年度を目指すカリキュラム改革の設計が終わった後での話です。つまりカリキュラムの全体を変えて、そして科目の教え方とか教材開発とか、そういうことをそれぞれの先生が変えて、その後にクォーター制を取り入れるという順番を大切にしたいということです。

竹内先生: 今日の話では4単位が大事である、ということですか。

池田先生: そうです。一つの意味のある学びの塊ととらえる必要があります。

竹内先生: 4単位には4単位分ぐらいの学習時間が必要ということですか。

池田先生: 体系的な科目のものはそうだと思います。

竹内先生: その一方では、週2回ではきついというのはどういう意味でしょうか。

池田先生: 週2回4単位でやるには、体系的なものの見方を身につけさせるには、単に与えるだけでなく、それを腹に落とすような教育の方法が必要です。教材についても、自分たちで取り組むような教材が必要です。それをレクチャー型で課題をどんどん提出させる方法にすると、学生はもう課題をこなすことにアップアップになる。

教員側がもっと時間をとって学生には余裕をもたせて教えるのが、大切だと思います。

竹内先生: 今期週5コマ、4単位科目が二つで、科目が三つしかないのですが、私の感覚では、ペア科目で教えると圧倒的に効果があります。それなのに、なぜペア科目をなくすのか、理解できない。池田先生がおっしゃるような時間的な余裕がこちらにもあるし学生も余裕がある。ただしやり方を変えなければならない。

池田先生: 2単位科目で5科目も教えると、一つの科目を学生はじっくり学ぶことができませぬ。教える方も内容を詰め込み、急いで教えがちになる。そういうことを先生方は忘れてしまっています。

竹内先生:クォーター制の議論は結局セメスター制を導入するときの話と全く同じ議論をしているように思います。

田口律男先生(「日本の文学A」等担当、経済学部所属):国立大学などでクォーター制を導入するのは、留学など何かメリットがあると思って導入しようとしているのでしょうか。

池田先生:国の改革課題に合わせた実績を作らなければならないという国立大学の事情があり、クォーター制の場合は、留学戦略のメリットが強調できて論理的には導入しやすいのでしょうか。

河村課長:うちの部署がクォーター制の検討をしているのですが、何のためにクォーター制を導入するのか、目的をはっきりしないと、おそらく入れても前のセメスター制の時の議論と一緒にになってしまうような気がします。仕組みだけの話であれば、今でも完全セメスター制にはまったくありませんので。

国際学部が導入したがっているのは、留学が義務化されているためです。国際学部だけに限ってクォーター制を導入するなら考えられるけれど、他の留学を主としていない学部に対しても導入するのは、意味があるのでしょうかと言って教学部サイドでは返しているのですが、トレンドだから入れたいと考へだしている部署もあります。

池田先生:現実的にはセメスターのなかでクォーター制を併用する知恵が導入しやすい。ゆっくり進める科目はセメスター科目、集中して学ぶ科目はクォーター科目というやり方でカリキュラム運営ができます。追大はその知恵でやろうと議論しています。

河村課長:クォーター制もきれいに1/4ずつするというやり方もありますが、2学期のところは柔軟に、例えばこの時期は一つのセメスターとして、タームとしてとらえるので、そこに授業科目をおいてもらってもよいですよ、どちらかという現実的にはそのほうがうまく回るのではないかと教学サイドは考えています。けれど、全学を統一しようとする、きれいに割ってほしいという意見が強くなってしまいう傾向があります。

池田先生:教務とじっくり打ち合わせして、教務の登録・履修システムを作っていく必要がありますから、時間をかけることは避けられない。カリキュラムは組織があって作っていくわけですから。

谷垣先生:クォーター制でも90分のままやるのか、60分にするかという流れがあるのですか。

池田先生:今追大では、いろいろ調べていて70分か75分の話が出ています。60分は教える立場からは短すぎるという議論です。追大で次に議論したいのは、学内の教材をみんなで共有しあうことです。教育の中身を学生に合わせた教材を作る。そのためには、学内でまずは学びのリソースをシェアしていく必要があります。そういう教材を外に出すと著作権とか色々処理しないといけないので、まずは自分自身で外に出してもかまわないような教材を作って、それを学内でためていく仕組みを議論する必要があります。

小瀬先生:提案は何度かしてみたのですが、なかなか難しいのです。歴史だと作りやすい気がするのですが、実際に取り組んでみると実際には難しいですね。統計資料を作ろうなんていうと、なかなかうまくいきません。

池田先生:教材づくりの件で追大の経済の先生と話したときには、「我々は学部生に大学院レベルの内容を、無理だとわかりながら、一生懸命教えているのだ」というような話を聞きました。なぜ大学院レベルから落とせないのですかと聞

くと、現代の経済学そのもののコンテンツがとにかく高度になっているからだという話でした。大学院レベルの経済学の内容を今の1年生とか2年生にどう教えるのか、そのための教材開発をするチーム体制や時間的余裕が実はないというのが本音だったかもしれません。東山先生は教材で図を使っておられましたね。やっぱり図の方が、学生は文章よりも反応が良いのでしょうか。

東山先生:教科書にだらだら実験について書いてあるよりは、まず絵を見せて、一通り大まかな説明をした上で教科書に戻るっていうやり方をとっています。

池田先生:それはいいです。図説はどこでも通用する方法ではないでしょうか。

田口先生:文学を教えている人間は、図ではなくむしろ本当にテキスト、言語表現そのものを大切にします。むしろ文字に触るように、言葉の手触りを重視しますので、逆に図を使って教える手法には、ちょっと・・・。

東山先生:文学の場合は絵を見せてしまうとそちらに引きずられてしまうのではないのでしょうか。

池田先生:これは追大の文学の先生から聞いた話ですが。明治期の小説を読ませるときに、コーヒーを飲む喫茶店の場面が出てきたとき、そこで一旦立ち止まって明治時代の喫茶店文化の状況を調べさせてみるとか、そういう時代の背景を楽しむ読ませ方をする、という話でした。教材の作り方も変わってきますね。

竹内先生:映画化された資料はどう思いますか?

田口先生:私はできるだけそういうことに頼らないことにしています。すこし古いタイプかもしれませんが、どこまでテキストだけで勝負できるか、という気持ちで教えています。

でも、同時代の視覚的資料を利用して、manabaなどを使えばドキュメントとしてあげることが可能ですから、良いことではないかと思います。

池田先生:専門を教える先生は急ぎすぎる傾向がある。教えるべき範囲が分かるものだから、それをカバーしようとする急ぎすぎてしまう。学生の準備度に照らすと大胆に内容を精選しないといけない。それがなかなかできない先生が多いですね。

小瀬先生:経済学部で、キーワードの共有化をしたことがあります。各自の先生が教えている科目の中で「これは絶対教えた」というキーワードを出し合って、お互いどういうことを教えているのかを共有しておこうとしました。そうすると皆さん、教えているワードではなく、教えたワードをあげたのです。そのため、途方もなく多い分量になってしまいました。経済学の単語が網羅されたような形になって、うまくいきませんでした。手法の背景にあるべき教員の合意形成に問題があったのですね。

池田先生:私は500ページある戦略経営のテキストを大学院で使っていました。しかし、ここだけは絶対学んでほしいところを精選するとしたら50ページ程度です。その時の授業の場合は、使える知識という私の経験に照らしてそれでもかまわないと思いました。

司会:非常に興味深い論点がいくつも出て、大変有意義な議論ができたと思います。とくに池田先生がお話しされた、ペア科目での時間の配分の仕方とか、学習内容と教える時間の関係、一コマの時間、60分がよいか、70分にすべきか、教材の精選と共有化など、学ぶべきことがたくさんありました。カリキュラムの一つのコースのコース設計を考えていく必要性を痛感しました。話も尽きませんが、時間も来ましたので、このあたりで終わらせていただきます。